

同人誌 (2017年8月号)

風 狂

風 狂 の 会

風狂第37号目次

詩

おみなえしの夏	出雲 筑三
真相	原 詩夏至
栄光を知る人へ	高村 昌憲
空 蝉	なべくら ますみ
歴史入門	高 裕香
ユカタン半島	北岡 善寿
残 相	長尾 雅樹

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（二十一）	三浦 逸雄
--------------	-------

エッセイ

一杯のコーヒーから	神宮 清志
-----------	-------

翻 訳

アラン『大戦の思い出』（三）	高村 昌憲 訳
----------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント（2017年7月号）

おみなえしの黄花が清楚に咲いている
秋の七草も最近温暖化で夏に咲くようになった
ときたま紋白蝶が訪ねてくると女郎花は凜とする

彼は根っこから江戸っ子だった
当然一番好きな唄は旅姿三人男
ざまあみろやい！ 文句あつかあと聞こえる

踏みにじられた歴史が続いている沖縄
だけどそれを嘆いても何も解決しない
芭蕉樹のように陽気に一歩づつでも前に進もう

そんな思いで彼は沖縄にくる
海は何でも受け入れてくれたので
ポッコリ腹も気にならない

最大の愉しみは奥方との海中散歩
しかし非情にも受動喫煙の害は
唯一の理解者だった伴侶を襲った

残された者は自滅を誘うように酒とタバコを飲み
自力で階段があがれなくなっても
高遠遊民の誇りをもち演芸場に通い続けた

それは女郎花の凜とした心意気
夏の日のもとに青い空に
白いモクモクとした雲がそびえたち昇っていく

たった今
殺した
ゴキブリが
動いている。

これは
ゴキブリの
リビング・デッド
〈 生ける屍 〉か？
それとも
ゴキブリの救世主が
奇蹟によって
死から復活したのか？
それとも……？

真相は
今となっては不明だ。
ゴキブリは
もう
逃げ去ってしまった。

きっと
にんげんの
リビング・デッド
〈 生ける屍 〉も
救世主も
事情は
同じなのだ。

栄光の絶頂から海外へ赴き
国内の名誉を放擲した人を
半世紀後に表した精神の秋
パリに残った悉皆了知の滯

嘗て賞を固辞し続けてから
大学教授にも未練を抱かず
自由を育て上げた日々から
味わい尽くした真実の柚子

柚子は譲るに通じるらしい
栄光の化石は他人へ与えろ
生きる時は必要ないらしい
五十年後百年後を思考しろ

他にも要らないものがある
占いと賭事と諂いと饒舌だ
他にも五月蠅いものがある
流行と情報と政治と経済だ

栄光に阿る人に真実は無
命を充実させる楽しみには
栄光も名誉も無い方が
真の楽しみを奪う虚栄の泡

街路樹の根もとに転がる

幾つもの蟬の抜け殻

体を強張らせ 背中を開けて

枝を張る上空からは降る勢いの

若い声

足もとに散らした抜け殻の持主か

源氏の君を袖にして寝所を後にした

空 蟬

薄絹の衣を残して

佇まいの美しい女御は

声を立てずに

死んでゆく

数日？

数時間？

数分？ の後に

丸く見せられると丸く見え
四角く見せられると四角に見える
だが、真実はわからない。

上から見て、下から見る
右から見て、左から見る
多角化に複眼的に

皆 白いボールに包まれ
ロマンすぎる ロマン
先人が残した 謎解きのよう

独りで歩むと迷い道
二人で進んでも迷い道
心して 先人の足跡を探る。

魂が気球のようにふわふわ
遠い地の果てに飛んだ
見渡す限りの瘦せた
がらがら蛇のいる大地に
暑い不毛の風が吹き
小さな村では火炎樹が燃えた
巨大な神殿の廃墟の
崩れた灰色の石の上では
イグアナが長い首を立て
曇り空を眺めている
滅びた民族が雨を待っていた眼だ
神も人もいない
時に曝されて色褪せた石室は
乱れ飛ぶ燕の住処
何処にだって
嘯みつかれたら最後の
無常の歴史が流れる
周りの青い林の中で鳴く
小鳥の声は阿呆のように明るい
この国へ来てから二十年という
額の禿げた房総生まれのガイドは
この世で悪いのはコロンブスであり
アメリカだと言った。
その男に郷愁はないのか
郷愁はガイドの研修に来た若い女の
丸い大きな塩溜りで泳ぐ
しなやかな身体に萌していた
昔風の臍の见えない黒い水着
その下に男を発熱させる神秘の罟が潜む
見えるものも見えないものも儂いから

俺は眼を閉じたいと魂が呟く

ユカタン半島のいつ時は

夕方に塩を嘗めライムを嚙って啜る

テキィーラで終わった

骸骨の横たわる大地に
黒ずみの影が落ちて
落魄の魂が迷う空間から
鷺の飛翔する姿が鳥葬を晒して
仰向けの状態で無常の骨格を投げる
夢のまた夢を過去世に刻んで
骨は沈黙の残闕を暦日に印している
肉片を全て剥ぎ落とされた
ひたすら風化を待っている亡骸から
沈降する生命のありし日の相貌は
おもむろに両手を広げて構える姿に写る
骨柄をバラされた隣りの頭骨から
骨片が地上を這いながら
死者の言葉は永遠の無音を貫くだろう

風雨

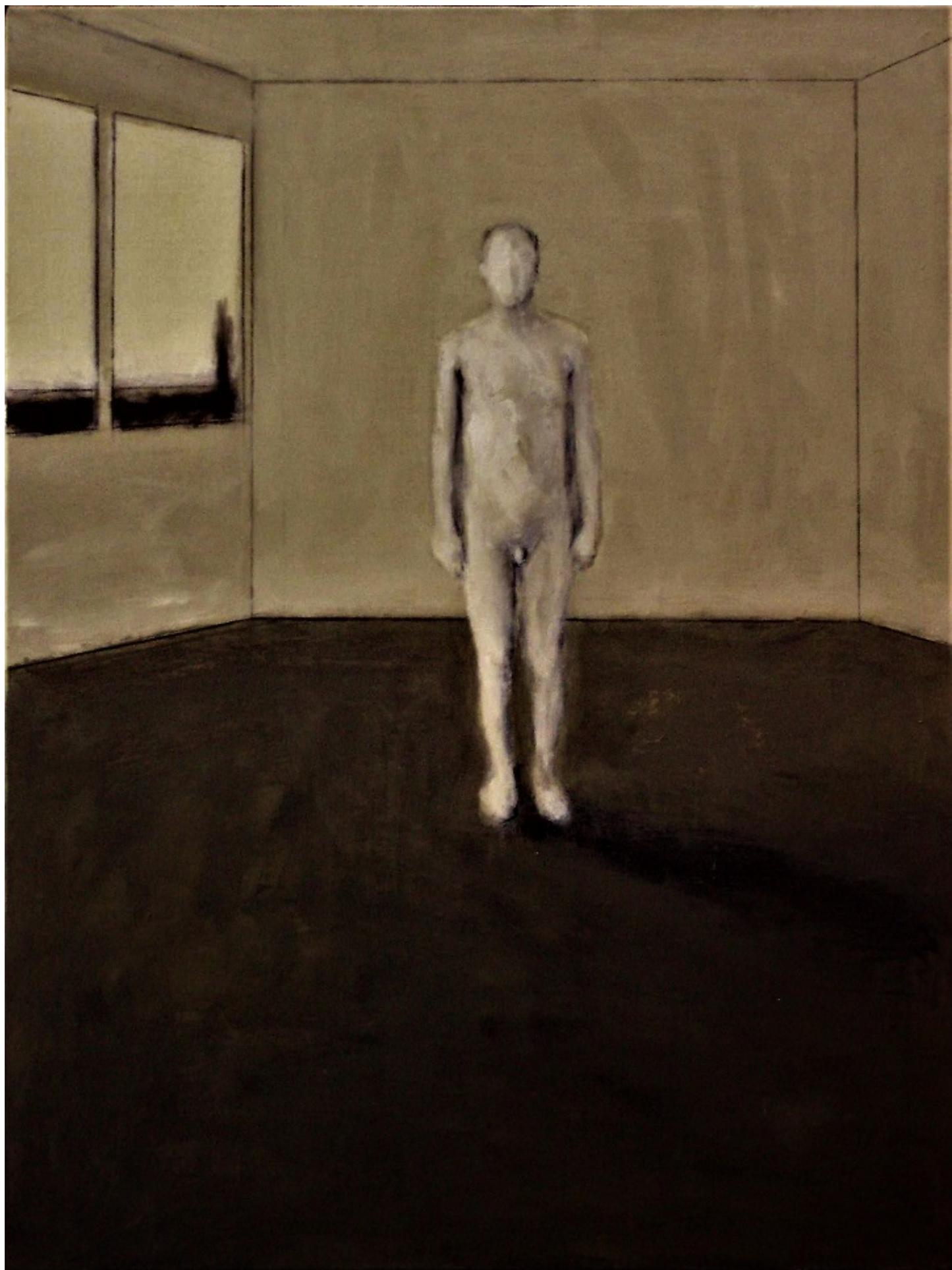
砂塵

骨相

空虚の窖に殷殷と整列する死霊たち
土に戻るための準備は出来ている
個体のままの骨の様相から
生きとし生きるものの最後の姿を観相する
見よ結末は露骨に死の跡を残映させる
待つ
粉となって散り失せる月日を繰り抜けるまで

語られた死の物語りの終末

骨はやがてボロボロに崩れて虚無を呼ぶ



三浦逸雄「立像」15号（麻布 油彩）

喫茶店に入ってコーヒーを飲む、というのはごく日常的な生活の一つだろう。「お茶しよう」という言い方があり、これはお茶を飲みながらおしゃべりしようという意味だ。この言葉が定着してからまだ数十年だろうが、この習慣そのものは意外と古いらしい。

久しぶりだね、その後どうです。
そこらの何處かで、お茶でも飲みましょ。

勇んで茶店に這入りはすれど、
ところで話は、とかくないもの。

これは中原中也の「春日狂想」という詩の中の一節である。この詩が作られたのは昭和十一年だから、このような習慣はすでに昭和初期に、都会では出来上がっていたものと見える。ネット検索してみると、明治二十一年に黒門町に本格的珈琲店「可否茶館」が開店し、大正十年頃から喫茶店ブームが到来したという。当時コーヒー一杯十銭だった。

店に入って席を取り、椅子に掛ける。と、そこへ注文したお茶が運ばれてくる。ここでいつも軽い緊張につつまれる。運ばれてきたお茶がどのように置かれるか、どうしても注目してしまう。コーヒーでも紅茶でもココアでも、必ずカップの下には皿があり、スプーンが乗っている。このときスプーンはカップの手前に柄を右にして置く。カップは持つところを左にして置く、これが決まりなのだと思っている。ところがこの通りに置かれないことが多い。ほとんどいい加減であり、たまに定法通りに置かれると、この店は上等の店だと思ふ。手前に置かれたスプーンの柄が右に延び、カップの持ち手が左に延びているというのは、見た目にも美しい。スプーンを取ってお茶をかき回してから、そのスプーンをカップの向こう側に置く。次いで左に延びているカップの持ち手を右手でぐるりと廻して右側に持ってきて、ゆっくりと口に運ぶ。これが正しい飲み方だ。この場合持ち手を向こう側に半周させるのが紳士、手前に回すのが淑女ということになっている。

といったことを教えられたのは、一八歳から入った水商売の世界においてだった。そこではこうしたいくつかの、この世界での決まり事を教えられた。本職としてこの世界で生きるには、そうしたことを心得ていなければならない、そのように先輩から仕込まれた。しかし今では世間の多くの運び屋（ウェイター・ウェイトレス）たちはそうした基本を知らない。もっともわれわれが入る喫茶店の運び屋さんは若い女性のアルバイトが多く、プロの運び屋を目指しているわけではない。だから正しい運び方を知らなくとも仕方ないかなど、軽い気持ちで見ている。それでもたまにその定法通りの置き方で供してくれる店がある。それも案外場末だったりする。こうした店ではアルバイトの女の子にも、きちんと出し方を教えているのだと判る。店主にその心得があるということなのだ。こういう店主の淹れるコーヒーは本格的なのだろう、そう思って飲むと一段と素敵な味に感じられる。

あるとき猛烈に腹が立ったことがあった。軽井沢の「万平ホテル」の大きなダイニングルームに入ったときのことだ。天井の高いクラシックな造りといい、古風で凝った調度といい、文句の

つけようのない超一級のルーム、そこには軽井沢特有の涼やかな高原の風が、大きく開け放った窓から吹きこんでくる。運んでくるウェイターは中年の男で、それらしい服装に身を固めている。当然お茶は定法通りに置かれるものと思いきや、まったくなくなっていなかったのだ。その途端むらむらと腹が立ってきた。よほどサロン主任かボーイ長でも呼んで、一言文句を言ってやろうかと思ったが、思いとどまった。何のためのあれだけの施設と環境なのだ。その中でも演出が駄目なら何もならないと落胆した。高い支払いをして、まともや何たることかと不快極まりなかった。ボーイの無神経さに腹が立ったことが強い印象となって残っている。

ボーイの心得としてこんなこともある。どんなものでも必ず銀盆に乗せて運ぶことになっているが、その持ち方に三通りある。掌をいっぱい広げてその上に銀盆をのせる、これが基本である。そのほかに掌を丸めて五本の指先で銀盆を支える。これは案外格好がよくて好むウェイターが多い。ビールなど運ぶには向いているかもしれない。親指と人差し指と小指を広げ、中指と薬指は折り曲げて銀盆を支える。この持ち方は粋で格好はいいが、安定が悪く重いものを運ぶには不向きである。コーヒーなど運ぶにはいいかもしれない。どんな持ち方でもいいが、飲み物とか食べ物を運ぶときは、ひじの角度が直角になるように持って、椅子に掛けた客の眼に入るような高さを保つことが大切である。それもいかにも美味しそうに運ばなければならない。すると客の注文も増えようというものだ。食べ終わった食器類を下げるときは、銀盆を持つひじは直角より鋭角にして、胸高に持つこと。そのようにして食べ残したものを、客の眼に入らないようにするという配慮である。

この世界のプロならこの程度の作法を心得ていていいはずである。なのに一般の飲食店では、ほとんどが心得ていないというのはどうしたことだろう。わたしは高校を卒業したとき、夜学出身であり、片親だったのでまともな就職先がなかった。街を歩いていると知り合いに会い、明日からでも働けるところがあるぞ、白いワイシャツを着て黒いズボンを穿いて来いよ、といわれた。その通りの格好で五反田の「カサブランカ」というキャバレーに行くと、その晩からボーイとして働くようになった。それから約四年半水商売の世界で暮らした。「カサブランカ」はグランドキャバレーとして一流であり、ここのボーイ出身者は出世した者が多い。ボーイの出世コースは、ボーイからリストに進む。これは社交さんの管理を主としている。社交さんとは業界用語でいわゆるホステスである。なんといってもこの世界で出世するには、ホステスをいかに扱うかが重要である。ここでそれを学ぶ。次いでボーイ長からサロン主任、サブマネージャー、そしてマネージャーになる。マネージャーになってからも様々な店を渡り歩き、最後は銀座・赤坂・六本木あたり一流店のマネージャーになる。こうしたマネージャーになると何でも心得ており、紳士としても立派な人格者が多かった。ボーイの指導にも優れていて、ここで本当のプロとしてのボーイになるべく細部にわたる指導を受けた。

重要な仕事である床磨き、バーテンの居るカウンターの中のこと、コックの居る調理場のことまで教えてもらった。酒に関する知識についても、専門家に相応しく膨大なものがあつた。客扱いはもとより、社交さんたちの扱い、そしてヤクザとの接し方などもあつた。先輩や同僚からこの世界で一緒にやろうといわれ、ある程度将来を嘱望されていたのかもしれない。しかし多少の資金が出来たとき迷うことなく大学に進み、堅気社会に戻ってきた。しばらくの間、夜はナイトクラブなどで働いてはいたが。以後ずっと堅気社会に居るけれど、こちらはこちらで虚飾が多く、また情実もあつて、すべてが甘っちょろく、あほらしいという側面はある。水商売の世界は甘

くはないし、実力のない者が一流店のマネージャーになることはあり得なかった。それだけ厳しい世界だったと思う。

その後グランドキャバレーもナイトクラブも消滅してしまい、風俗店が取って代わるようになっていった。やはり堅気に戻って正解だったのかなと思わないでもない。しかしこの世界に居たこと、そこでしか経験できなかったことについて、年を経るにしたがって小さくなかったことに気付き始めた。当初はほとんど感じていなかったばかりか、ずいぶん遠回りをしたものだとか嘆いたり、無駄なことをしたものだとか考えていた。しかし中年以後に至り、この経験の意外な貴重さに気付くことが多くなった。

その一つにこんなことがある。渋谷のナイトクラブのマネージャーは、日本バーテンダー協会の参事だった。バーテンダーの草分けに近い存在で、洋酒に関しては該博の知識をもっていた。今でも忘れられないのは、歴史の古い国ほどいい酒があるというご高説である。歴史が古いだけでなく、一定以上の文化を守り育ててきた国でなければならない。フランス、ドイツ、イタリア、中国、日本などには世界的に誇れる酒がある。新興国であるアメリカにはロクな酒がない。西部劇を見ると、カウボーイが喉の奥に放り込むように酒を飲んでいる。こうでもしなければ飲めないほどに不味いのだ。大麦を材料としているスカッチウイスキーに対し、ケンタッキー・バーボンに代表されるアメリカのウイスキーは、トモロコシ、ライ麦などを材料としており、どれをとっても低級そのものではないか。アメリカで発達したのはカクテルだが、あれは不味い酒を飲ませるために甘い味を付けたのと、ご婦人に飲ませるには甘くするのが好都合だったからだ。だからカクテルなど美味くもないし、酒としては邪道に過ぎない。この説にはただ感心するばかりだった。このほかにいろいろ教えていただいて、今になると貴重そのものだった。とくに洋酒に関しては、毎晩蘊蓄を傾けて尽きることがなかった。してみるとこのバーテンダーの長老は、長年カクテルを作りながら、それをしたり顔に注文する客を内心軽蔑していたのかもしれない。

バーテンダーはカウンターの中で、いつも手を動かしている。酒の瓶を手にとって、布で拭いたり、グラスを拭いたりしている。あれには提供する飲み物を綺麗にする、というほかに重要な意味がある。実はこの動作は店が開く前からやっている。それは点検なのだ。酒がもう少しで底をつくか、すぐに補充する必要があるか。それともう一つはどこにどの酒が置かれているかを、常に頭に入れておくことである。客が注文した酒にまっすぐ手が行くようではなければならない。客のほうを向いていて、酒瓶は背中の棚に並んでいる、その酒瓶のあり場所に最短距離で手が伸びなければバーテンダーとは言えない。客と談笑していて、酒の注文を受けたとき、客に背を向けて棚の中の酒瓶を探すようなみっともない真似がどうしてできようか。掃除をしつつ点検と整理をしているのである。

この教えにはいたく感心し、日常生活の中でしばしば思い出して整理整頓に努めたものである。どこに何がどのような状態で置かれているか、そのことをいつも頭の中に入れておくと、生活のメリハリも違うし充実の仕方も違うばかりか、精神衛生上もよろしい。掃除し整理することの大切さをここで教えてもらったと思う。その後それほど励行したわけでもないが、そのことの意味を教えられたことが限りなく大きかった。

それにしてもあれだけの心得のあるボーイは、キャバレーにしか居なかったのかと思うと不思議な気がする。それほど一流のレストランとかで遊んだ経験もないのだが、どう振り返ってみてもそんな心得のあるサービスなど受けたことがないのである。本物の奥深い作法を心得たウエ

イターが昔のキャバレー・ナイトクラブには居たのに、何故にその後の一般のレストランとか喫茶店には見当たらないのだろう。文化的な頹廢ではないかと思ったり、その必要もなくなったのかと寂しく思ったりしている。それだけに運ばれてきたコーヒーが、定法通りにテーブルに置かれると、それだけでその日一日がなんとなく嬉しくなるのである。 〈完〉

第二章 (その2)

ここで長い付き合いにはなりませんでしたが、B大尉のことを少し書きます。私は彼を森の中で垣間見ましたが、ほっそりしていて機敏で優雅でブロンド色の長い口ひげがあり、長いマントを着ていました。英雄のイメージそのものです。ところが彼は最も臆病な人の一人でした。彼の用心深さと恐怖と逃げ様には皆が笑っていました。この点に関してもう一人の大尉が、私の前で彼に言っていました。「だけど、もしあなたが歩兵隊にいたなら、どうなるのかな?」。これに対してB大尉は答えました、「この場合は戦闘の場面に身を置くとしますよ。でも、ここで自殺させられる以上に愚かで無益なことは何かあるでしょうか?」。この答えには心惹かれました。完全に勇敢になるためには、恐らく最早何も期待してはいけないのです。そして、私は歩兵隊の中尉や少尉たちを見ましたが、彼らは自分たちの人生に終止符を打っていた様に見えました。彼らの陽気さは私をぞっとさせました。そのことでは私は後ろにいました。人は常に誰かの後ろにいるのです。私たちが臆病に戻ったとしても、お分かりの様に精神が無い訳ではありませんでした。しかしながら恥辱は避けられず、認識して理解していた司令部の精神までも彼の中では消失させていました。その様な人間を扱うことは何ものでもありませんでした。少なくとも今では私が発見した軍隊の滑稽なことの中で、私は自分の役割を大変上手に演じていました。私たちは蠟燭しか持っていませんでした。私は上官から石油ランプとブリキ缶を買わされてきました。私には大変に自慢です。しかし、その大尉は私に言いました、「このランプは何処から持って来たのか?」。私の答えについて彼は極めて真面目に言いました、「あなたが軍の照明費用を払うことは認められない。そのランプの火を消せ」。私は口実を発見しました。何故ならそれは私の仕事であり、そして私は自分の仕事をする術を知っているからです。私は言いました、「大尉殿、私はこのランプを軍の電話のためには決して使用しません。只、単に私の私用の手紙のために使うだけです」。私が同時に二つの仕事を行っていたことに気付いて下さい。私はそれ故にランプを守りました。けれども私はそのことのために、優しさに溢れた彼の視線が全て偽りであったとは決して信じませんでした。実際に彼は理工科学学校出身者でした。この種の人間は、私も知っていた様に正当化する術には大変上手に長けていました。彼は私の巧妙な口実について私に感謝していただろうと思います。一度ならず私は彼に厚意を感じましたし、私たちの間で彼は迷っている様でもありました。彼は最後には引き下がりました。彼には実際に、棍棒や車輪が砲台に欠くことで利益を図る様な仲間はおりませんでした。

もう一人の理工科学学校出身者は全く卒業したばかりで、若い雄鳥の様に大尉の前に立ち上がりました。この者はル・バルビュという名前の戦士でした。明らかにブルターニュ人で、明るい顔付をしていて赤毛で、部下たちに大変厳しいのですが、勇猛果敢で皆から尊敬されていました。私たちは友人になりました。私たちの楽しみの一つには計算規則を研究することがあり、休憩時間に黒いテーブルで議論することでした。しかし私が気付いた限り、大砲に関する幾何学的な進展は上官たちに如何なる効果も生まれませんでした。私はついに分かったのですが、彼らの重要な関心事は権力を持つことであり広げることだったのです。そして、まさに戦争についての影響がどうであるかという、それは恐らく射撃装置や輸送や他の作戦よりも重要だったのです。監

視で養われて大変に熟練したゴンティエが言っていた様に、砲兵が身につけている幾つもの注意力をもって彼は何時も発砲します。しかしながらBは休暇を濫用していたと言えます。ル・バルビュは私に言いました、「第七砲兵中隊は長くジョアニーに止まっていることになるかも知れない」。

秩序を破壊したこの話は私の記憶を思い出させますが、その他の多くの人々と共に守っていたメッツの道も私は思い出します。私たちはコレージュの生徒の様に陽気でしたが、少し息切れしていました。或る雪の日でした。数々の大きな砲弾が鉄橋を渡る列車の様な騒音を立てていました。ル・バルビュは尋ねました、「連中は何でも狙っているんだ。だって連中は何も見ていないし、上空での雪との巨大な摩擦音は弾道を短くすることが必ずあり得るからね」。それから十分に駆け回った挙句に他の話も色々となりました。私たちが立入禁止地帯を調査するには、視界を遮るこの雪は好都合でした。サン＝ボサンの町を見下ろす丘へ私たちは行きました。その時は視界が悪く、ゴンティエが雲雀の様に現れた時まで偵察手は穴の中に這入り込んで暇をもて余して談笑していましたが、ゴンティエは私たちを見てすっかり満足しています。彼は私たちに景観を語りました。すると一種の魔法によって、彼が語ったものがだんだんと眼に見えて来たのです。その時は雲の切れ目だったのですが、私たちは見ている者が見られもすることに気付くのが遅すぎました。ゴンティエは穴に潜り込みました。そして私たちも潜り込みました。ル・バルビュと私は加速して大急ぎに走って退却しました。殆ど直ぐに七七ミリ砲が私たちを追いかけました。その上、遠い距離ではありませんでした。しかし個人的に狙われていると考えると、勇敢な者たちでも混乱します。ル・バルビュは私には十分すぎるお手本でした。私は兎の様に彼の後に続いて走りました。その後、私たちは哲学の問題も話しました。この若き英雄は飛行でも有名でした。彼は〈勇者〉と呼ばれていました。彼は私を、今度は大空の冒険に連れて行きたがりました。しかし私は聞こえない振りをしていました。私は単に命令を実行するだけです。決して危険を求めていることを規定の様に理解していたので、この時もそれと同じ状況の一つでした。結局のところ軍法の改正が、私に選択する様に強く命令する漠然とした時代に、私は自分自身に何を期待されているのでしょうか。私は退屈な仕事をする前からは後退していました。十年後には全ての自由を私に委ねた大学の働き口を選択して、そしてもしも戦争が未だ続いていたなら、私は研究していただろうと自分に言いました。一九一四年八月に、私自身と結んだ約束を守りたくて、そして私の重荷によって歩兵隊から離れたかったので（レジョン・ドヌール勲章は重要でしたし、私は今でも心が動揺しています）、私は好機に導かれる儘になって、誠実に私の仕事を行うだけでした。自己との誓いの成熟した部分や好奇心の同じ部分も、その点についてもっと適切に言えるのは、私は悲劇的な時代の間でも市民生活に我慢しなかったことです。そして多分、下劣なありふれた考えや反乱の間で、砲兵と同じ位に危険な道を取っていたでしょう。

上品なB大尉は毎日曜日に、森の中へ必ずミサへ行っていました。そして、私の若い時の仲間であったWは殆ど必ず自分の服にブラシをかけて、大尉と一緒にいました。このことは私には少しも気に入りませんでした。Wは何も信じていませんでしたが、礼儀正しいために昇進していました。ところで彼は礼儀正しさを信じないのでしょうか。それを信じる処は始めと終わりまで、覚えるのも容易ではありません。大多数の人々の信仰において、信じている様に見える人々にとっては尊敬以上のものがあるのでしょうか。この問題はそれ以来私には興味がありましたし、数々の深刻さを発見しました。しかし、私たちが存在していたこの悲劇の中では、私はそれらの微妙

な意味合いを斟酌する用意は成されていませんでした。私は、戦争において〈キリスト教〉が人々を駆り立てるために熱心に働いているのを見るのが大嫌いでした。従軍司祭たちの処に私はいます。金モールが三本入っている警察の縁なし帽子を被ったその一人に私が会った最初、私はもう一人の大尉の処へ走って行きました。その彼は私が出合った唯一無二の人でした。私は彼に、階級や敬意の動作についての教育で、金モール三本（大尉）の司祭のことを話しているのを一度も聞いたことがなかったと言いました。私は敬礼をするべきだったのでしょうか。この大尉は、私が或る時は快く、或る時は気難しく親密な関係にならざるを得ませんでした。一種の職人でした。恐ろしい程の気まぐれであっても知性があり、管理することが巧妙で十分に勇敢でした。彼には宗教色が少しもありませんでした。彼は私に言いました、「私は、その階級は分からない。あなたがやりたい様にやりなさい」。二日後に、私は敬礼をしないことにより自分で気に入りました。その頃は私も戦争にあつては既に第二期でした。今までよりもっと多くの時間的余裕も出来ました。集団を作りながら、若くて単純そのものの何人かの下士官たちとテーブルを囲み、正面にある荒廃した家の中で、今まで以上に人間らしい生活をしていました。私はヴォルテール風の肘掛け椅子に座って議長になり、〈将軍〉と呼ばれていました。この議会に、軍人たちの墓の問題で半ば司祭で半ば大尉の、傲慢で冷淡な男がやって来ました。彼は下士官たちにしか話さない様に大変な注意を払っていて、「この家の〈元帥〉を言ってくれ」と言いました。彼らの年齢になると至る所で大事にされていたために自然な動きとして、皆がテーブルの大統領に答えを待つ様に私の方を向きました。私は嘲りには精通していますが、獰猛でした。既に今日では、それで良しとしています。でも、何故でしょうか。それは好人物たちを酷く悲しませるからです。どんな種類の独裁者たちも、無抵抗の服従が回復させた不幸の日々において、希望を取戻しに行ったことを私は良く知らなかったのでしょうか。精神と力のこの奇怪な同盟を前にして私は躊躇することが出来たのでしょうか。勝利にとっては非常に確実であっても、共通した悲しみの底を極めて上手に描いたこの二重の自負に、私はこれ以上耐えられないものでした。そこで私は如何なる混じりものも無い純粋な勇者になりましたし、確かに一徹になったのです。私の若き友人たちは心を奪われてうっとりしていました。それからこの〈殿下〉は素早く注意深く撤退しました。それに反して、親切で諦念していて眼に見える権力への如何なる加担も無い若い司祭と、泥だらけの電話交換兵や歩兵に対しては、何という配慮でしょう。同じ日に、大変に泥だらけになったこの〈神〉の男のことで私は、金モールの無い電話交換兵の伝言を傲慢に受取りに来たB大尉を嘲笑しようと試みました。私はB大尉に言いました、「あなたはあの男のことを知っているのですか。恐らく知らないでしょうね」。彼は殿様風に言いました、「それで何かあるのか」。「彼は司祭です」と私は彼に言いました。「あゝ、そうだ。私は知っている」と彼は答えました。そして私はつけ加えて言いました、「本当の司祭とは、祭壇に〈神〉を降ろさせる力を持っている人です」。でも、私の砲弾は何の効果もありませんでした。私はそのことを十分に予想しなければなりません。〈神〉は司令部と共にいるのです。それでもそれらのことは問題になりません。B大尉にとって一種の謎あったことでも、私は自慢することさえ出来ません。その時から私は偉大な演技を理解したくありませんでした。何故彼は私に手を差し出したのでしょうか。秩序には召使いが事欠かないのです。頭の良い人はそこで大変に美しくて尊敬された地位に就きます。もしもその地位を拒否すれば、頭の良い人を最早誰も注目しません。しかしながら私は自分を騙さないなら、権力を望まないこの不愉快な精神を権力者たちは益々慎重に扱

わなければならなくなるでしょう。(完)

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近は

視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発売してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ 971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忠詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。個人誌「パープル」（一九九六年～二〇一七年）、一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（papier）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『—ノルマンディー人のプロポ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつぐら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）等。現在短編小説集『永遠の、地上の（仮題）』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齡知命に達した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半にかけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄

高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェツシー、ラヴェル、セロニアス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ理事、日本短歌協会会員。

三浦 逸雄（みうら かつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。

帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

読者からのコメント（2017年7月号）

LL教育の源流を訪ねて：LL教育のことを、多方面から詳しく教えていただきました。

三浦逸雄の世界（二十）野に立つ少年：少年は広野に抱かれているようでした。

幸福の王子：希望は持ち続けたいと思います。最終連に感動しました。

お螻蛄 と爺さん：野菜売り場にどうして螻蛄が紛れ込んでいたのでしょうか。子供の頃みかけたのを懐かしく思い出しました。螻蛄さん、暑い都会では生きづらいですね。

赤い帽子（ソンプレロ）の男：旅芸人の男の生涯が、舞台の物語を見ているようです。

吝嗇を知る人へ：貧しくは無いのでしょうか。吝嗇家のことがよく分かりました。危険も発明も企ても活動もあった方がいいですね。貧しくば心に富もうという言葉が浮かびました。

アラン『大戦の思い出』（二）：大戦経験は尊いですね。M少佐はリウマチだったのですね。嫌われ者の大佐になったのは残念に思いました。どんな恐怖の中にいたのか、「権力者による奴隷の身分でした」という言葉に胸を打たれました。

護佐丸：琉球王朝の立派な武将と歴史を教えていただきました。

顔：この暑さでいつもぼ～としています。頭が空っぽで作品が書けません。ユーモアや軽みには味があっただけいいと思いました。

仮名文字：色々な仮名文字があったのを知りました。最終行に共感しました。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)

第37号 (2017年 8月登録)

<http://p.booklog.jp/book/116339>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/116339>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト